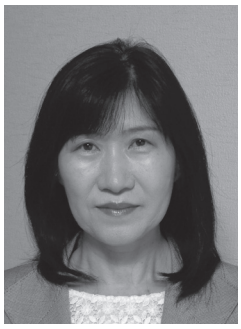
学校を創る

「内郷ならではの教育」と人材育成



佐倉市立内郷小学校長　田辺（たなべ）　直美（なおみ）

1　はじめに

グローバル化や情報化など社会の変化は予想以上に急速かつ高度に進展し，現在，学校教育は重大な転機を迎え，教育改革，そして人材育成は喫緊の課題となっている。

佐倉市は，豊かな自然，歴史，文化に恵まれた「教育のまち」である。佐倉藩主堀田正睦公の天保の藩政改革が学問興隆（たかし）の契機となり，日英同盟を結んだ「林董（ただす）」，津田塾大学の創設者「津田梅子」をはじめ，近代日本を支える優れた人材を数多く世に送り出してきた。佐倉は，江戸時代から教育に力を注ぎながら，次代を切り拓（ひら）く確かな人づくりを進めてきたまちである。

本校は，その佐倉藩飯野校を端に，明治41年開校，今年で創立108年になる歴史と伝統のある学校である。変革の激しい今こそ，前に踏み出し，仲間と協力しながら，社会に貢献できる人材の育成が重要であると考える。

2　「内郷ならではの教育」の推進

著しい社会変化に対応するには，現状打破や新領域を開拓できる確かな学力と，将来への夢や希望を持って歩む姿勢が大切である。

⑴豊かな心と学習意欲の向上

第一に，本校では，バス通学者に合わせ，７時50分を始業時刻とし，朝の読書（10分間）とドリルタイム（15分間）を毎日実施している。学力の基盤づくりをするとともに，落ち着いた雰囲気で１日を始めている。さらに，学校図書館司書や図書館・外部団体の方々と連携し，読書活動の充実を図っている。

第二に，専科教員による音楽科指導とＡＬＴによる外国語活動を１年生から実施している。専門性の高い指導により，国際教育の推進，学習意欲や豊かな感性の育成を目指している。

第三に，能楽体験教室などの本物に触れる体験活動を積極的に取り入れ，全校あげて参加している。将来の夢や希望を思い描く機会を，児童の学習意欲へとつなげている。

第四に，自校給食を生かした食育の推進である。学校栄養職員と連携し，地場産物等の学校給食を活用した効果的な指導で，主体的・創造的な判断力や行動力を育成していきたいと考えている。

⑵縦割り活動による豊かな人間力の育成

小規模校の良さを生かし，異学年交流の充実を図っている。集団登校・下校，全校遠足や長縄大会，６年生を送る会等の様々な場面で縦割り活動を推進している。多様な人間関係の中で，リーダーシップ，協調性，社会性等の豊かな人間力やチームでの問題解決力を育んでいる。

⑶地域との協働による児童の育成

これからの教育は，地域と協働し，社会に開かれた学習を推進することが重要である。本校は，特別養護老人ホーム「佐倉白翠園」の訪問や車椅子シルバーダンス会での交流，内郷地区社会福祉協議会主催の敬老のつどいや福祉まつりでの発表などをしている。お年寄りとの触れ合いを大切に，思いやりの心を育み，集団の中で自己を生

かす力を育てたいと願っている。

また，内郷地区まちづくり協議会と協働し，芋掘り体験や佐倉子どもかるた大会，餅つき交流会などを開催し，地域の良さを発見し，ふるさと愛を育む機会を創っている。

３　「学び続ける教職員」の育成

佐倉に連綿と続く「好学進取」（学問を好み，新しいことに挑戦する。）の気風を生かし，よりよい教育を求め，真摯に学び続ける教員が集う学校づくりを目指していきたい。

⑴教職員の資質・能力向上

第一に，校内授業研修では，全教員で国語科研究に取り組んでいる。ＩＣＴの活用や言語活動の充実，表現力の育成を目指した授業実践，マンダラシートを活用した協働的な協議会により，授業改善に努めている。今年度は，日本の伝統や文化を大切にした研究，アクティブ・ラーニング（活動的・能動的な学び）を通じて児童の主体性や学習意欲の向上を目指す授業に取り組んでいる。

第二に，教職経験６年目までの教員を対象に若年層研修として，能動的自立研修を用いて，自己の課題を解決する授業研究を行っている。授業者は若年層教員であるが，全教員で検討し授業力の向上を目指している。

第三に，目標申告シートや職務能力発揮シートの活用である。目標の達成に向けて主体的な取組を支援したり，目標を学校全体で共有・協力したりすることにより，能力開発や人材育成，学校組織の活性化を図るよう尽力している。

第四に，ＯＪＴを組織的に推進し，日常的な職務を通して，必要な知識や技能，意欲，態度などを意識的，計画的，継続的に高めるよう努めている。教えながら自分の教育指導や校務の遂行状況を見直す機会としている。

⑵チームとしての学校力の向上

第一に，「学び」「心と体」プロジェクトチーム会議を月１回全職員参加で開催している。学力向上，特別支援教育，生活指導や生徒指導，体力向上等の改善提案により，共通理解のもとでの指導や主体的な取組が行われるよう努めている。

第二に，専門職や関係機関との連携である。児童や保護者等の様々な課題への対応やいじめの防止のための対策を推進するため，学校支援アドバイザーや心の教育相談員が派遣されている。体制整備が推進され，教育相談や課題対応能力の向上につながっている。

第三に，外部人材の活用である。児童への学習支援を充実させるとともに，連絡や打ち合わせ方法等を学び，教員自身の企画・交渉・運営力を高めていきたい。

第四に，他校や関係機関と連携したＪＲＣ活動の推進である。活動を通して，児童だけでなく教員自身にも気づき・考え・実行するという態度や，計画・実践力を育成し，学校運営への積極的な参画への意識を高めることにつながっている。

４　おわりに

これからの時代を生きる児童には，主体的・創造的な判断力や行動力が必要であり，未来を見通し，社会変化を柔軟に受け止め対応するような発展的な教育が求められている。前述したように，佐倉には，伝統として息づく「好学進取」の気風がある。本校でも，「内郷ならではの教育」を生かしながら，組織マネジメントによる機動力のある体制で，新しい時代に即した教育を目指していきたい。そして，生涯にわたり学び続け，社会の発展に貢献できる児童や教職員の人材育成に強い信念を持って取り組んでいきたい。

学校を支える

生徒指導の機能を生かした学校運営の一つの取組

～「チーム銚子中」による日々の生徒指導実践から～

銚子市立銚子中学校教頭　小関（こせき）　宏昌（ひろあき）

1　はじめに

本校は，平成25年度，銚子市立第四中学校と銚子市立第八中学校が統合されて誕生した，開校４年目の新たな歴史を刻んでいる現在進行形の学校である。

銚子市の中心部に位置する町場の学校であるため，交通量が非常に多く，交通安全指導への配慮と，海抜２メートル程度の低地もあり，防災・安全指導への的確な取組も求められている。

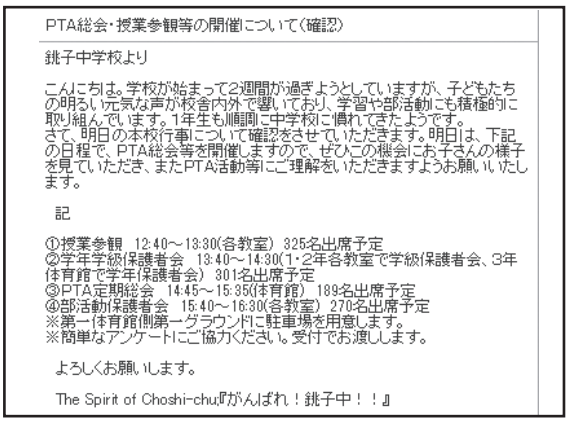
このような中，安全・安心で開かれた学校づくりに全力で努力しているところである。

教頭として２年目となり，校長の温かな指導に支えられて実践ができていることに，改めて幸せを感じるとともに，自己反省の気持ちを持っている次第である。校長からは，「学校は大きな家族」「喜怒哀楽を表現できる生徒の育成」を柱とした学校運営の実現に協力して欲しいといわれている。ここでは，具体的ないくつかの取組を紹介する。

2　「学校は大きな家族！」チーム銚子中への意識付け

本校は各学年４クラス，特別支援学級２クラス，全校生徒430名の市内で１番規模の大きな中学校として，地域の大きな期待と多くのニーズに応える使命のある学校でもある。

そこで，まず職員と生徒に提案したことは，「学校は大きな家族」の精神である。何事にも相互に共生の精神を持ち，苦楽を共にしながら歩むことを訴えた。職員は生徒に寄り添い，何でも率直に話すことで，生徒にも同様の効果が見られ，例えばいじめ問題に関しても，自他のことを丁寧に情報提供できる雰囲気が育ち，問題の早期発見，早期解決の体制が構築された。職員の即行動（指導）の姿勢は，生徒のみならず保護者からの信頼を得ることにつながっている。新たな歴史をつくる上でも，この家族愛は大変有効な集団意識形成に役立つと捉えている。そしてここから生まれた本校のキャッチフレーズが，「The Spirit of Choshi-chu；『がんばれ！銚子中！！』」であり，学校メールや校内掲示物には必ず載せることとなった。**（図１）**



PTA総会・授業参観等の開催について（確認）

銚子中学校より

こんにちは。学校が始まって2週間が過ぎようとしていますが、子どもたちの明るい元気な声が校舎内外で響いており、学習や部活動にも積極的に取り組んでいます。1年生も順調に中学校に慣れてきたようです。
さて、明日の本校行事について確認をさせていただきます。明日は、下記の日程で、PTA総会等を開催しますので、ぜひこの機会にお子さんの様子を見ていただき、またPTA活動等にご理解をいただきますようお願いいたします。

記

①授業参観　12:40～13:30(各教室)　325名出席予定
②学年学級保護者会　13:40～14:30(1・2年各教室で学級保護者会、3年体育館で学年保護者会)　301名出席予定
③PTA定期総会　14:45～15:35(体育館)　189名出席予定
④部活動保護者会　15:40～16:30(各教室)　270名出席予定
※第一体育館側第一グラウンドに駐車場を用意します。
※簡単なアンケートにご協力ください。受付でお渡しします。

よろしくお願いします。

The Spirit of Choshi-chu『がんばれ！銚子中！！』

図１　学校メール

3　今年度は，「喜怒哀楽」を正しく表現できる感受性豊かな生徒の育成を期して

本校生徒の気質的特徴として，本当に子どもらしい中学生であり，表面上生徒指導の問題はない。しかし，内面的なものを変容させることで，さらにすばらしい生徒になるのではないかと分析した。そこで何事

においても，陰日向なく素直に内面を表に出せる生活環境をつくることを目指し，「『喜怒哀楽』プロジェクト」を今年度の生徒指導目標とした。この４つの感情を素直にかつ上手に表現できることで，気持ちのよい挨拶や返事，発言等々ができ，いじめや不登校問題にも大いに抑止効果があると捉えた。年度末の評価分析を楽しみ（？）に，指導を進めている。（図２）

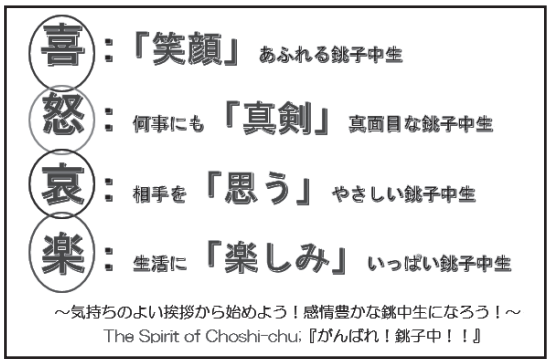


図２　喜怒哀楽プロジェクト

４　生徒の実態から期を逃さない生徒指導の展開

本校生徒は，現在非常に落ち着いており，校訓どおり文武両道にたいへんよく努力している。特に部活動は活発に行われており，若い職員構成も後押しし，必ず顧問が付いた中で日々の活動が積極的に行われている。明るくさわやかな生徒の挨拶と活気のある声が校舎内で響き渡り，よい雰囲気の学校になっている。先人の職員及び保護者の努力に感謝するとともに，「生徒のよい状態を更によくする！」を合言葉に，今，職員一同，積極的に心を揺さぶる生徒指導に取り組んでいるところである。

そこで，昨年度３学期に生徒に提示したことがある。更により良い学校にするために必要とされるキーワードを，生徒会を通して全校生徒に伝え，実践及び評価を行ってみた。生徒個々に，「自身に変化」を求めた結果，これまで以上により良い学校生活を送ろうとする姿勢が育ってきたと考える。（図３，表）

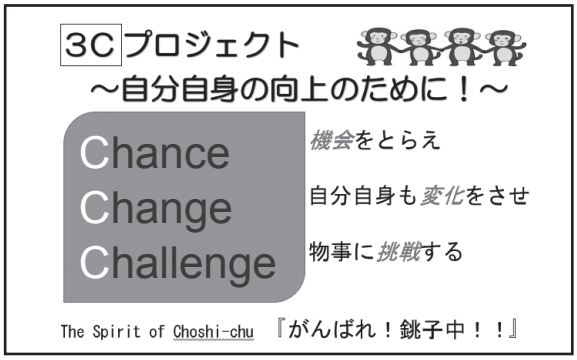


図３　３Ｃプロジェクトの掲示物

表【H27 学校評価　生徒調査結果から抜粋】

Ｑ１学校は楽しいですか。	肯定的９６％
Ｑ２授業に一生懸命取り組んでいますか。	肯定的９５％
Ｑ３学校はいじめをなくそうと努力している。	肯定的９４％
Ｑ４服装や頭髪など，学校のきまりをきちんと守っている。	肯定的９５％

※４項目共に前年度よりプラスの評価

５　ＰＤＣＡを生かした生徒指導と学校運営

私は常に，「生徒指導には最善もゴールもなく，実態・気質・周囲環境等々によっても，取り組み方は無限にある。」と考えている。そして「教師のインスピレーションは合っている。」を信じて即活動（行動）することを職員には常々話している。さらに，生徒指導で忘れがちなことは，活動して終了という場合が多いということである。本校では，必ず評価をし，次の方向性を検討するようにしている。まさにPDCAサイクルの「CA」が生徒指導では大切であるということである。必ず評価をし，生徒を褒めること（褒められるように導く）が，生徒指導には絶対必要だと考える。

６　おわりに

PTA 役員を含め，校長を中心とした銚子中大家族と共に，「チーム銚子中」の一員として，生徒指導の機能を生かした学校運営に今後も努めていきたい。

学校を動かす

「学校を動かす」≦「学校が動く」

県立津田沼高等学校教諭 後藤（ごとう） 浩一（こういち）

教員生活も24年が過ぎ，本校では６年目を迎えた。昨年度から教務主任として学校の発展のため，様々な課題に取り組んでいる。私が心掛けていることは，自分が「学校を動かす」というよりも，生徒や先生方が行動することで「学校が動く」ようにするということだ。そのために，私は教務主任として“今”何をすべきかを考える。難しいことだが，この理想は見失わないようにしている。

１　「学校を動かす」≦「学校が動く」

本校には教頭・主幹教諭が中心となり，各分掌の部長・主任からなる「企画委員会」がある。この委員会で職員会議の議題はもとより学校運営上の問題を提起し，幹部職員同士の意見・情報交換の場として機能している。

私は教務主任として，企画委員の先生方とのコミュニケーションを図りながら，各分掌の先生方の意見を幅広く集め，「学校が動く」環境づくりに努めている。

２　異文化の混在

サッカー部の顧問をしているおかげで，これまで海外に出向いたことがある。スポーツというのもまた，その国の国民性や文化が現れるもので，例えばサッカーの場合，オランダは攻撃，ドイツは守り，アメリカはヨーロッパと南米のサッカーの両方を取り入れ，身体能力を生かしたサッカーという具合である。こうしたことを現地で学んだ。

私はこれまで高校６校の職場を経験したが，それぞれの学校の目指すべきものや学校運営の仕方など，極端にいえば国が変わったような違いがある。生徒も先生方も，伝統もルールもそれぞれ異なる。

また，どの学校も同じ悩みを抱えていると思うが，ベテランと若手をつなぐ中堅教員（30代後半から40代前半）の教員が極端に少ない。さらには，学校を支えてきた職員の退職や異動，初任教員の増加など，私が教員になったころの環境とは大きく変化している。国でいえば異文化の混在という状況だと思う。この学校組織を動かすために，どうしたらよいのだろうか。

３　原点に返る

これまでの教員生活では，学級担任と部活動顧問（サッカー部）のウェイトが大きく，自由奔放にやらせてもらっていた。そんな私が学校運営全体を考える教務主任なんて･･･。

人は先が見えないほど不安なことはない。その任を受けたからには責任を持って取り組もうという気持ちはあるが，先が見えない。そのような中で考えたのが「原点に返る」ということだった。教務主任だからといって肩肘張らず，幅広く先生方の意見を集め，これを真摯に受け止め，“今”自分ができることをやる。まさに初任の頃の気持ちに立ち返り，業務に取り組んでいる。

また，「新任教務主任研修」では教務主任という立場を同じくする先生方のネットワークが生まれ，貴重な情報交換ができ，大きな財産となった。

一人の力で「学校を動かす」ことはできない。しかし，生徒，先生方，保護者の皆さんの声を聞き，“今”自分ができることを積み重ねていけば，「学校が動く」のだという信念で，教務主任を務めていきたい。

研修を生かす

「観」を磨く
～長期研修を終えて～

袖ケ浦市立昭和小学校教諭　南（みなみ）　啓介（けいすけ）

1　はじめに

昨年度，長期研修生として貴重な学びの機会をいただいた。私が学んだ分野は他の教科･領域と異なり，「教育臨床プログラム」に沿って，県下から集まった仲間と共同で研究・研修・実習を進めた。

2　「目から鱗（うろこ）が落ちる思い」

千葉大学での講義では，教育相談における「開発的・予防的」な視点，人間は生涯にわたり発達するという生涯発達の視点，子どもの育ちを理解する発達理論，教師が陥りやすい考え方の偏りや盲点等を学び「目から鱗（うろこ）が落ちる思い」を経験した。また，千葉県子どもと親のサポートセンターでの講話・演習・実習でも「聴く」ことの難しさと大切さ，「気付き」に基づく変容，「見立て」の視点の広がり等，やはり「目から鱗（うろこ）が落ちる思い」を経験した。

この「目から鱗（うろこ）が落ちる思い」とは何か。昨年度得た知識の中には，これまでにも学校現場で触れたことがあるものも少なくなかった。しかし，それらが「目から鱗（うろこ）が落ちる思い」として感じられたのは，その言葉の大切さや真意に自ら気付けたからである。

もう一つは，気付き得たものをこれから学校現場で実践できるという実感が持てたことである。どんなに大切だと分かっていても，実践できない事柄であったら「目から鱗（うろこ）が落ちる思い」とはならない。これまでの捉え方・見方・視点を少し変えれば，大切だと分かり，実践できそうだということに気付けたことが「目から鱗（うろこ）が落ちる思い」だったのだと思う。

3　「チームで学ぶ」意義

私たちは，千葉市の長期研修生を含めた８名で研修を重ねた。校種や経験，年齢等バックグラウンドの異なる者同士が教育観，価値観，人間観といった様々な「観」をぶつけ合うことに大きな意義があった。他者と意見を交わし，その「観」に触れ，自己の「観」を見つめ直すことで，少しずつ成長していけるのだと実感した。「チームで学ぶ」ことには，互いに支え合える安心感がある一方，皆の考えを一つの研究としてまとめ上げる苦しさもあった。しかし，その苦しさから逃げず，思いを伝え合い，もがき葛藤する過程で，互いの「観」に気付き，新たな学びを得ることができた。誰かから教えられたものではなく，葛藤の中から気付き得たものは，自分の中に残り続けると確信している。

4　「観」を磨き続ける

教職に就いた頃，先輩からいただいた言葉が，今でも心に深く刻まれている。

「教師に大切なことは『観』を磨くこと」

昨年度，正に「観」を磨くことを実感しながら研修するという貴重な体験をさせていただいた。研修の中やその合間に長研生同士で「観」について話し合い，振り返ることで自分自身の「観」を見つめ直し深めることができた。職場でも，同僚との何気ない会話の中で，互いの「観」を共有し合うことが，自己理解を進め，自分の「観」を見直し磨き続けていくことに繋がるのだと思う。これからも，同僚や地域の仲間，周囲の人々と「観」を共有し，磨き続けていく。

授業を創る

理科って面白い！

「魅力ある授業づくりの達人」認定教員
木更津市立岩根小学校教諭　斉藤（さいとう）　照恵（てるえ）

1　はじめに

平成27年度の全国学力・学習状況調査から児童の多くは，理科が好きである。けれども，教えている先生方はどうだろう。「準備が大変。」「自分は文系だから。」「専門の知識がない。」等の理由で，理科離れをしていないだろうか。また，学校事情により，教務主任等が理科を担当しており，理科の授業をしたことがないという学級担任も増えているのでは…。これは理科教育の危機である。

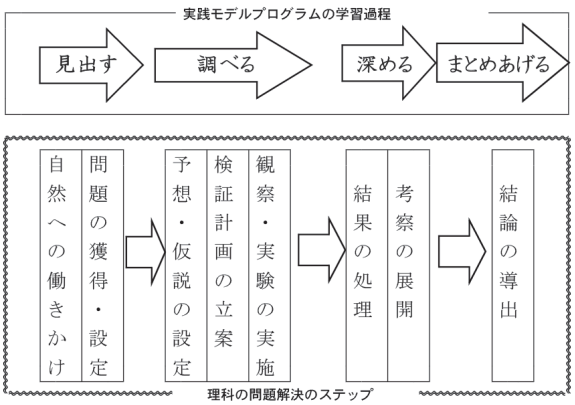
でも，理科の授業は，やってみると教師だって面白い！教科書があれば大丈夫！！もちろん，本県教育委員会が進める「思考し，表現する力を高める」指導だってできる。

‥‥‥それは，本当？

2　「思考し，表現する力を高める」実践プログラムと理科の学習との関連

平成21年3月に本県教育委員会によって作成された「思考し・表現する力」を高める実践モデルプログラムの学習過程がある。その学習過程を理科の問題解決の学習と照らし合わせると以下の**図1**のようになってくる。

図1



このように，理科における問題解決の学習は実践プログラムの学習過程と関連付いており，理科の授業の中で，問題解決の学習過程をふむことにより，「思考力」・「表現力」を育むことができると考える。しかし，これは教師が一方的に与えるのではなく，児童が自ら考え，取り組むようにしていかなければならない。‥‥‥では，どうやって？

3　各ステップの実践例

⑴見出す

ここでは，自然科学の事象に出会わせ，児童に「不思議だな！」「本当にそうなのかな？」「これは調べなくちゃ！」と思わせることが大切である。

例えば，**4年「ものの温度と体積」**。空気は温めると体積が増えることを学習したあとに，水の体積変化の事象に出会わせる。

「あれ？水も温めると膨らむのかな？」
「でも，空気より膨らまないみたいだな。」
「確かめてみようよ。」

3年「ゴムや風でものをうごかそう」。ゴムで動く車を作ったあとに問いかける。「さあ，競走だ！どうしたら速く遠くまで走らせることができる？」

「ゴムをたくさん伸ばすと速く走るよ。」
「遠くいくよ。」「どこまで走るのかなあ。」
「確かめてみようよ。」

5年「台風と天気の変化」。台風が来るとどうなるか問いかける。

「風で物が飛ばされる。」
「停電する。」「川があふれる。」
「だから，来そうなときは，外に出してある物をしまうよ。」「雨戸を閉めるんだ。」
「川には近づかないようにする。」
「じゃあ，台風がどこからどうやってくるのか予想しないと・・・。」

このステップで重要なのは，児童自身が考え，話し合うことにより，問題を焦点化・明確化し，自分の問題として，主体的に取り組むように仕組むことである。

⑵調べる

理科の授業にとって大切な観察・実験の段階である。児童は意欲をもって取り組むであろう。・・・・・・さあ，実験だ！！

でもちょっと待って。ここでは，予想・仮説をもち，それをもとにして観察・実験などの計画を立てる。

「○○だから，□□で確かめたら，△△になるだろう。」
「□□で，△△になったら○○といえる。」

というように，言語や図によって表現させることが大切である。

先ほどの**5年「台風と天気の変化」**。問題を見出したあとに，

「日本の天気は，西から東に変わっていくから，台風も同じだよ。」
「じゃあ，衛星画像や雨雲レーダー，アメダスのデータも西から東に動いていくかなあ。」

というような予想にもとづいて，結果の見通しをもたせて取り組ませる。ただやみくもに調べても，結果の読み取りが不十分になったり，曖昧になったりしてしまう。

⑶深める・まとめあげる

ここの場面は，問題解決のステップの中で，最も「思考力」「表現力」が育成できるところであろう。けれども，結果だけで満足し，深まらないことがよくある。・・・・・・だって，難しくない？

そんなことありません。まず，結果(事実)をおさえ，何がわかったのか考えをまとめればよいのである。

5年「もののとけかた」。食塩水の重さを調べたら，食塩水の重さ＝水の重さ＋食塩の重さになった（結果）。このことから，「溶ける」ということは，「消える」「無くなる」のではなく「見えなくなる」ことに気付かせる（考察）。（さらにここでは，「溶ける」ということを粒子モデルでイメージさせるとよい。図２）

図２

また，結論を導き出す際には「学習問題に対する解答を文章でまとめる」ことを意識すればよい（つまり学習問題のたて方が重要なのだが・・・）。この過程を何度もくり返し経験させることにより，児童が結論に迫るような文章を考え出せるようになってくる。

４　まとめ

以上のように，特別な技能や知識が無くても心配なし！

教師の働きかけ，問いかけによって，理科の授業がぐっと変わるはずである。児童自らが主体的に取り組むようになるし，そうなれば，児童はもちろん，教師だって面白くなること間違いなし‼

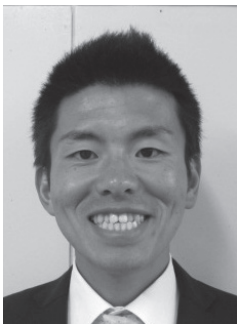
ぜひ，挑戦してください。

【引用文献・参考文献】

・「『思考し，表現する力』を高める実践モデルプログラム」　千葉県教育委員会
・「小学校理科『問題解決』８つのステップ－これからの理科教育と授業論－」　村山哲哉著　東洋館出版社　発行
・「小学校理科－事例でわかる！－子どもの科学的な思考・表現」　村山哲哉編　図書文化社　発行
・「新版 たのしい理科３年，４年，５年」　大日本図書　発行

子どもを知る

子どもたちに自信を付けさせること



いすみ市立東小学校教諭　浅野（あさの）　誠（まこと）

私は今年度，５年生の担任をしている。一人一人が高学年として責任感をもち活躍できるよう日々取り組んでいる。その中で「よく聴き，よく考え，互いを認め合える学級」を目指している。

４月当初，自分の意見を言うことに消極的で自信をもてない子どもがいた。また，周りを気にして失敗を恐れてしまい，勇気をもてない子どももいた。そんな中，白子町立白潟小学校の青木紀子先生の「道徳の授業力アップ実践研修」から学んだことがとても生きている。

青木先生の姿勢からは子どもたちの気持ちを受け入れ，認めていく温かな雰囲気を強く感じた。「○○くん，よく手を挙げているね。」など子どもたちの頑張りを積極的にほめて勇気付けていた。また，友だち同士話し合うことが活発に行われ，考えを共有していた。授業中，友だちの話を真剣に聴き合い「良さ」や「違い」に気付く子どもも多くいた。そのような環境からどの子どもも生き生きと発表をし，活躍できる学級が存在すると思った。間違いを認め合える学級が，子どもたちの居場所をつくることができると思った。

子どもたちと同じ目線・気持ちを忘れずに子どもたちの良さを見出していきたい。そして，青木先生のように子どもたちの考えを受け入れ自信をつけさせられる教師となれるよう，日々，努力していきたいと思う。

子どもを知る

一年を振り返って

県立安房特別支援学校鴨川分教室教諭　花城（はなしろ）　綾香（あやか）

朝，にこにことスクールバスから降りてくる子どもたちの笑顔を見ると，学校を楽しみにしていることが伝わり，私も嬉しく思う。特別支援学校の教諭となって二年目になり，子どもたちの笑顔に囲まれながら充実した日々を過ごしている。振り返ると，一年目は子どもの実態把握や課題設定がうまくできずに悩んでばかりであった。しかし，ペアの先生と毎日下校後に，子どもの様子を話し合ったり，子どものことを相談したりすることで，将来を見据えた指導を少しずつ考えることができるようになった。また，視覚障害の児童の指導をするにあたって，生活や学習する中でどのように感じているかを知りたいと思い，目を閉じてご飯を食べてみたり，用意した教材を目を閉じて試してみたりした。そこでは，今まで集中して聞いていなかった音や，これまで経験したものとは少し違う匂いや触感，味覚を感じることができた。児童の立場になって，身体全体で感じ，触って見ることで，おのずと課題や指導の手立てが見えてきた。子どもたちは障害の状態や個性等，一人一人異なり，その子に合わせた指導，支援が大切であると学んだ。ひたむきに学習に取り組む姿や，「できた」と言う時の子どもたちの笑顔は今，私の原動力となっている。子どもをよく観察し，気持ちや行動の背景を理解しようとする姿勢を持ち続けたい。また，子どもの持っている力を最大限に引き出し，伸ばせる教師を目指し努力していきたい。